＝書　評＝

今堀誠二著『中国史の位相』

岡　元　司

一九九二年に逝去された今堀誠二博士は、実地調査にもとづく中国の村落・都市に関する研究や、近代史・現代史への鋭い考察などによって、優れた業績の数々を世に遺された。さらに中国前近代史についても、本書に多く収められているように、常平倉をはじめとする社会福祉史に関して、宋代史を中心に、先駆的な論考を発表されていた。本書は、そうした前近代史を軸として、古代から現代に至るまでの中国史関連の論考を集めたものである。

中国前近代史に対する取り組みについて、著者自身は、次のような前提にもとづいて分析を進めていた。すなわち、「まえがき」によれば、「私の中国研究は、二十四史に代表される漢籍に思想的根拠を求めず、これらを儒教史観に基づく政治論文であると規定するところから始まっている」（i頁）とあり、「この種の史料には、民衆の生活の現実とか民衆の願いなどについては、全くといってよいほど記されていない」（ii頁）と述べられている。

こうした著者の考え方は、日中戦争下の中国に渡り、著者自身、民衆とじかに接していたことが、重要な意味をもっていたようである。「旧来、民衆は前近代的な社会経済の下で悲惨な貧窮生活を強いられていたのであるが、その上に戦禍が加わって、深刻な苦難に追い込まれた。その中にあって、北京の街に溢れる餓殍の姿を見、中国の民衆が数千年にわたって搾取され虐げられ続けて、今もなお悲惨な状態におかれていることに心を傷め、それらの人々が解放される為の一助になればと、中国史における福祉の仕組みや相互扶助のあり方を研究、その矛盾点を探ることに没頭していた一青年学者がいたことを、心にとめて頂ければ幸いである」（五〇九頁）と記す「あとがき」（今堀宏三・和友・百合子の三氏による）からは、自身の体験を原点とした、著者の中国史研究に対する緊張感が伝わってくるように思われる。

このような著者の姿勢は、資料収集の面においても著者の独自性を発揮させることとなり、既刊の『中国封建社会の機構』『中国封建社会の構造』『中国封建社会の構成』の三部作は、庶民の手紙、契約書、村の規約、ギルドの会計報告など、第一次資料の発見と収集に全力を尽くした著者ならではの成果として、価値ある業績となっている。そして、かような資料へのこだわりは、本書の中心となっている宋代のように、庶民についての直接の史料が容易に見出し得ない時代に関する研究においても、論文発表当時、利用がまだまだ限られた範囲であった『宋会要輯稿』の原本を北京図書館にて閲

覧し、更に『永楽大典』に引用された地方志の記事を多数用いることで、宋代社会の実態把握を飛躍的に深化させている。

本書の構成は、人間解放史の視点から中国史の変化を整理した「序論」に続き、第一部「古代の位相」、第二部「中世の位相」、第三部「現代の位相」に分けて諸論文が収録されている。以下、順にしたがって、内容を紹介していきたい。

まず第一部の第一章「古代の常平倉」は、漢代に軍事力を支えるための糧秣基地であった常平倉が、晋代および南北朝をへて、唐代前期に穀価統制を目的として華北・華中に広く設置され、後期にはさらに常平義倉として賑糶・賑給・賑貸など恵民的な役割を増すに至るまでの変遷を跡づける。ただし、常平義倉を支えるために農民はかえって多大の負担を負わされ、倉は、官吏のほかに、地方の士族や遊侠土匪の徒によって食い物にされていたとしている。

その士族について、静態的分析をおこなったのが第二章「唐代士族の性格」である。ここでは、士族についての予備概念を整理した後で、士族がいかにして維持されたかを論じ、主観的差異、職業・血統・地位・文化・家族制度などの差異を分析することによって、世族門閥から官僚へ、つまり六朝士族から宋代士大夫への過渡期の存在として、唐代士族を位置づけている。さらに第三章「唐代封爵制」では、封爵の等級・授与・相続や食封制に関する過去の研究の問題点を考証し直している。

以上の第一部計三章は、一九三九～一九四三年の間に原載されたものであるが、続く第二部の計五章は、先にも触れた北京図書館での著者の調査を経たうえで、一九四二年以降に相次いで発表された論考である。

まず第一章「宋代常平倉」は、この章のみで一〇〇頁をこえる長編であり、『永楽大典』所引の諸地方志の記事が、十分に利用された論考である。本章では、常平倉の編制（行政的組織・経済的組織・倉儲的組織）、常平倉の運用（賑糶・賑糴・賑貸・賑給・賑工・支借）など、制度・運用について詳細に明らかにされるとともに、宋代常平倉の変遷が三期に区分して捉えられている。すなわち、北宋初から英宗時代までが草創期とされ、次いで神宗時代の新法施行以後が、全国の州県に普遍的に常平倉の設立された発展期とされている。そして南宋は解体期とされ、中央の統制を離れて独立化の傾向が見られたが、全国的組織網を持って始めて威力を発揮できる常平倉は、地方単位となる時はその活動力が著しく減殺された、と論じられている。また、常平倉と社会との関係が、官僚・胥吏・豪族・商人・貧民の五つに分けて取り上げられており、「通説とは逆に、常平倉は豪族の為の制度でもあり、彼等の利益となるところが少なくなかった」（二四四頁）と述べ、豪族が常平倉を食い物にしていた点を強調し、逆に貧下戸には実恵が及んでいなかったことを指摘している。

次の第二章「宋代平糴倉」も、『永楽大典』所引の地方志の記事を有効に利用して、その分布・設立時期が追跡され、とくに南宋末期六十年間に集中していたとされている。平糴倉（地域によっては平糶倉と呼ぶ）の制度・運用については、都市の米価調節を目的として軍・州・県等の地方政庁が自己の計算と責任において設立経営した賑糶倉であって、そうした意味で、資本主義的な方法によって運用されたものとしている。しかし、本章においても著者は、その使命である社会政策として、果たしてどれくらい済民に役立ったかとの疑義を呈している。そして、都市の小民が大なり小なり実恵に浴したことを認めつつも、国民の大多数を占めた農民や、都市の極

貧者・中産者等がその恩恵の範囲外に置かれた点、あるいは扱ったのが米のみであった点、社倉に見られたような大衆的組織を欠いている点などの限界を挙げている。

続く第三章は、「宋代の社倉」である。本章ではまず、社倉の変遷について追跡し、隋唐時代には義倉と未分化であったのが、中間的段階の北宋を経て、南宋になって社倉の概念が確立したことを、朱熹の社倉法が魏掞之の社倉の模倣であったことに触れつつ、明らかにしている。次に、文集や『永楽大典』所引の地方志に拠りながら、南宋における社倉の地域的分布を細かく検討している。それによれば、揚子江・珠江等の育む広大なデルタや盆地に存在する倉は非常に少なく、社倉のほとんどは南嶺に切り込んだ河川の縦谷、殊に閩江・赣江・湘江等の水域に沿って発達していた。つまり、広大な平野は河川や運河による運輸が発達し、かつ常平倉始めいろいろな機関に恵まれていて、社倉を必ずしも必要としなかったが、山間の小盆地ではその点には全く恵まれないので備荒貯蓄が絶対に要求されたからだと論じている。また、これら各地の社倉について述べる中で、保甲法・保伍法などの官設的自治によって行われていた朱熹社倉に対し、他の社倉には朱熹と様々な点で異なった方法を用いたものが多く見られ、朱熹に比較してはるかに自治的におこなわれる社倉が大部分であったと論じているが、これは、地方志の記述を丹念に読み込んだ著者ならではの興味深い指摘であろう。

こうした検討を踏まえつつ、著者は社倉の制度的性格・社会的性格を整理している。すなわち、（一）地方自治体（社）の倉であった、（二）都市には行われずに郷村で行われた、（三）常時の賑貸を第一目的としていた（この点で青苗法と相通じていた）、（四）創立に当たっては官または私人の財を一時借用するが、それは返済し、自己の資本を自ら運転する事によって維持発展を企図するという意味で、資本主義的経営を行った、という四点が制度的性格として挙げられている。また、社会的性格としては、自作農の保護という点では幾分かの使命を果たしたものの、小作農や窮民が見捨てられるうらみがあった。さらに豪右には、進歩的思想によって行動したものも多かったが、豪右の多くは利己主義者であり、或者は社倉を白眼視し、或者は逆に社倉を己の機関と化して搾取を合法化し、また自分の地位を利用してその穀物を私物にしてしまう者もあった。官僚にも、国利民福のために奮闘する者は少なく、かつ胥吏も腐敗の原因となっていた、などの点が指摘されている。

第四章「宋代冬季失業者救護事業」は、賑糶・賑給・収養による宋代の冬賑事業の様相について述べ、とくに、冬賑の他に賑糶・賑貸・捨子救済・救荒などをおこなった広恵倉、冬季窮民収容事業の性格を色濃くもっていた養済院について論じている。その中で著者は、広恵倉について、その経営が大なり小なり民間にまかされた場合には、成功を収める可能性を高めたが、政府や官僚の介入の程度がひどくなるにつれて、大衆に奉仕するという趣旨を失い、大衆の支援を失って没落したと指摘している。また、養済院については、南宋でかなり全国的に設置されていたことを述べつつも、やはり胥吏・従業員らが貧しい者を食いものにし、官僚も局面の糊塗と責任逃れを身上としていた、などの問題点に触れている。

なお、第五章「山東運河略記――元代から清代――」は、山東省の運河の歴史、構造、運河をめぐる社会状況を概観したものである。

第三部は、一九七六～八七年の間に発表された中国現代史に関する論文を収めている。ここでは、被爆地ヒロシマにて研究生活を送り、平和運動にも足跡を残された著者の思いが、色濃く投影されて

いるように思う。

そのうち、第一章「革命家の栄光とその軌跡」は、周恩来の死の直後の一九七六年三月に書かれたもので、平和外交を推進した周恩来の、若き日以来の活動についてまとめている。

一方、第二章「中国の原爆観の推移（一九四五－五五）」の中では、毛沢東あるいは中国政府の原爆に対する捉え方が論じられている。ソ連の政治的立場の考慮から、原爆の理解、被爆者への思いが不十分であったり、中国による日本の原水爆運動に対する評価が、アメリカの核を「ハリコの虎」にするためにすぎなかったことなどが指摘され、自らの核武装を推進しつつ、西欧陣営の原爆政策に反対するという当時の中国の「二刀流」の論理の背景が、浮き彫りにされている。

続く第三章「新民主主義政権の思想的・社会的基盤（一九四九～五三）――愛国主義と愛国公約からみた権力と民衆の行動――」は、民間団体として始まり発展した愛国公約が、権力の下部機構に位置づけられるようになり、民衆による運動が急速に停滞していく過程を描いている。

第四章「中国の成文法と『生きた法』――根強い共同体の伝統定着にはイバラの道――」は、中国の官憲が制定した法律や命令が「官様文書」として実効性がなく、民衆自身で作っているいろいろな「生きた法」が存在していることを指摘し、そうした法思想の中国における永い定着と法制の近代化のはざまで生じる問題点を論じている。

巻末の文滴「今日の中国」は、著者が一九八七年に広島平和文化センターでおこなった講演記録で、中国革命のつまずきの原因や日中友好のあり方などが、わかりやすい言葉で述べられている。

以上が本書の概略であるが、収録された主な論文の原載の時期から半世紀が過ぎ、文中の用語などに若干の隔たりを感じる部分がないわけではない。また史料閲覧をめぐる状況も、当然のことながら大きく変化している。しかしここでは、そうした点にこだわるのではなく、むしろ半世紀を経てもなおわれわれが本書から学ぶべき点が多々あるのではないかという関心をもって、著者の宋代史についての考察を中心に、その特色ないし研究史的意義を、以下で考えてみたい。

まず第一に指摘すべき点として、初めにも触れたように、著者が中国の民衆の視点を常に意識していたことが挙げられ、このことは、社会福祉事業との関わりについて、著者がしばしば社会の各階層に分けて考察し、とりわけ当時の民衆にとって実際にもっていた意味を欠かさず論じていることに表れているように思う。また、第二部第二章の原載時の「宋代平糴（糶）倉批判」、第二部第三章の原載時の「宋代社倉制批判」という題は、今となっては、やや直截的に過ぎるきらいはあるかもしれない（本書では、ともに「批判」の語は削られている）が、中国滞在（この二つの章は、ともに一九四二年の発表）における日々の観察から出た著者の実感にもとづいたものであるとすれば、決して突飛なものではなかったであろう。

つぎに第二点として、最近の宋代史研究においては、南宋史の重要性が注目されつつあり、北宋から南宋への変化についての議論が聞かれるようになってきているが、著者の宋代社会福祉史研究においては、そうした変化について、既に度々論及されていることに、あらためて気づかされる。すなわち、近年の宋代社会史研究においては、とくに欧米等の研究者によって、北宋から南宋へと推移するにしたがって地域エリートたちの社会的活動の範囲が、地域に重心

をおいたものへと変化していることが指摘されている。[1] そして、著者も、第二部第一章の常平倉について論じる中で、南宋になって、中央の統制がおこなわれなかったのに対し、州県で自ら積極的に常平倉の設立がおこなわれていたことや、南宋における地方の独立化傾向の基礎として、地方豪族がおのおの地方を支配するほど強力となり固定化してきたことを指摘している。また、第二部第三章で社倉について論じる中においても、南宋における社倉の発展を、「南宋時代の広い自治運動や郷村の開化の波に乗った」（三〇四頁）ものとして捉えている。近年の宋代社会史研究は、王朝による史料や士大夫の文集だけでなく、地方志の積極的な利用にも大きく依拠しているわけだが、著者も史料へのこだわりを持ち、早くから地方志の記事に着目していたが故の先駆的な見解と言えるのではないかと思う。

しかし、第三点として、同じく北宋から南宋への変化に注目し、しかもそれを思潮の変化と関連づけて議論する方向性は、近年の宋代社会史研究と著者との間でやはり共通しているものの、南宋における思潮自体の掘り下げ方については、両者の間でやや異なっている部分があると考えられる。すなわち、たとえばハイムズ氏の論考においても、朱熹や陸九淵の思想が、南宋期のエリートが地域での役割に重点を置いたこととの関連で捉えられているが、著者は、さらに南宋期の官僚における反新法主義の横溢についても取り上げ、そこから「南宋では不正の取締りのみに論議が集中されて、建設的な主張は少しも行われなかった」（二五四頁）と指摘している。南宋の思潮に対するこうした捉え方は、近年の研究の中では、北宋から南宋への思想の推移を「内向き」への変化として把握した故劉子健（James T.C.Liu）氏[2]とむしろ似通っているように思う。

以上、宋代社会福祉史を中心に本書の特色を整理してみたわけだが、あらためて感じるのは、著者の観点が、最近の宋代史研究の興味深い論点――いずれも今後更に議論・検討する余地のある論点ではあるが――を、いわば先取りしているかのように見えることである。この点において、とりわけ地域社会史研究の活性化しつつある現今の学界状況に照らせば、著者の研究の先駆的意義を再確認し、より広く内外の研究者に知らしめる意味で、本書の出版は、非常に時宜を得たものと言えるのではなかろうか。

また、地域社会を観察する場合、ともすればそれが地域の士大夫研究と等置されてしまっているものが時として見られるが、かりにそうした士大夫を取り上げるにしても、常に地域社会全体の中での客観化をはかる必要があろう。宋代社会史研究を進めていくうえでのこうした原点を、著者ならではの分析によって実際に示しているのが、本書のまた一つ忘れてはならない意義であるように思う。

そして最後に付け加えるならば、「中国人」を身近に感じる著者の学問姿勢は、「中国」礼賛でもなければ、現在でも時折見られるような「中国」を断罪するが如き歴史観でもない。今、改革・開放の進む中国と日本との密接な関係は、以前とは比較にならないほどの人的交流を生み出している。旅行や留学のために中国に気軽に渡航し、また逆に中国からの留学生たちを身近な友人として日々接している。そのように一人ひとりの等身大の「中国人」との交流ができる時期を迎えている現在のわれわれの感性に、著者のこうした姿勢は、思った以上に近いように感じられてならない。

註(1) Robert P. Hymes, *Statesmen and Gentlemen: The Elite of Fu-chou, Chiang-hsi, in Northern and Southern Sung,*

Cambridge: Cambridge University Press, 1986. Robert P. Hymes and Conrad Schirokauer, eds., *Ordering the World: Approaches to State and Society in Sung Dynasty China*. Berkely and Los Angeles: University of California Press, 1993.

(2) James T. C. Liu, *China Turning Inward: Intellectual-Political Changes in the Early Twealfth Century*. Cambridge: Harvard University Press, 1988.

（一九九五年十月刊、勁草書房、四＋五一一頁、九二七〇円）

〈付記〉 著者からの依頼を受け、原典にあたっての校訂から校正に至るまで、本書の刊行のために多大のご尽力をなされた横山英広島大学名誉教授に、この場を借りて敬意を表したい。

（和歌山工業高等専門学校一般教育科）